

早春賦

2月4日の立春を過ぎて以降、日一日と日差しは強くなり、春は直ぐそこに来て
いると感じます。

空気も温かくなってきて、庭の積雪量は目立っ
て減って来ました。とはいえ、北海道では春の陽
気を感じるのはまだ先のようです。「早春」とい
うよりは「春浅し」という表現の方がしっくりし
ますね。

ところで、春を歌った歌には、「どこかで春が」
「春」「春が来た」「春の小川」そして「さくら」
と数え上げればきりがありませんが、「早春賦」
という歌もまた大変有名で、私ぐらいの年齢だと
恐らく知らない人はいないでしょう。

この歌が出来たのは大正時代の事で、長野県安曇
野の早春の様子を歌ったものといわれています。

また、この「早春賦」を作詞されたのは、作詞
家であると同時に、文学者で教育者でもあった吉
丸一昌とおっしゃる方で、彼が40歳の時に発表
された作品です。

なお、吉丸氏は、生涯にわたって苦学生達のために労を惜しまなかった人といわ
れていますが、1916年の3月7日に43歳という若さで亡くなっています。

さて、「早春賦」という歌詞は右の通りですが、如何にも、春が待ち遠しくてなら
ないという感じが伝わって来ますね。

「歌は思えど」というのは「歌を歌いたいという思いはあるのだけれど」という
事であり、「葦は角ぐむ」というのは「葦は芽を膨らませている」という事です。

そして、3番目の歌詞にある「胸の思い」というのは、「焦がれる程に春の到来を
待つ我が思い」という意味になりますが、私は、もしかしたらこの詩は、吉丸氏が
自分の青春時代を思い起こして書いたのかも知れないと思っています。

つまり、「いかにせよとの この頃か」というのは、「かの人への想い、会う日を
待ち焦がれているこの気持ちを、一体どうやって押さえろというのか」という、青
年の押さえ切れない思いを歌ったのではないかと、私には思えます。「本当の春がな

早春賦

春は名のみ 風の寒さや
谷の鶯 歌は思えど
時にあらずと 声も立てず
時にあらずと 声も立てず

氷解け去り 葦は角ぐむ
さては時ぞと 思うにあやにく
今日も昨日も 雪の空
今日も昨日も 雪の空

春と聞かねば 知らでありしを
聞けば急かる 胸の思いを
いかにせよとの この頃か
いかにせよとの この頃か

かなか到来しない」、その事への抑えがたいじれったさが、詩を通して伝わって来るようです。

「早春賦」は、雪に閉ざされるようにして会うこともままならぬ、かの人への恋心に懊悩する吉丸氏の青春時代を歌ったものというのは、想像の膨らませ過ぎでしょうか。

勿論、小学唱歌をこんな風に理解するのは怪しからんとお叱りを受けそうですが、小学唱歌として聞き慣れた歌の中にも、血の滾るような別な世界があっても良いのではないかと、私は思っています。

さて、三寒四温という言葉があるように、春は直ぐそこまで来ていると安心してると、冷たい風に首をすくめてしまう、そんな日も少なくありません。まさに「春まだ浅し」です。皆さんには、お風邪等召されませんようお気を付け下さい。

(塾頭：吉田 洋一)